

要請訪問における素晴らしい実践紹介

1学期中における要請訪問では、子供たちの学び方のよさを感じることができたとともに、とても参考となる実践を多々参観することができました。また、「自ら学ぶ子供の育成リーフレット」を参考としながら、明確な意図をもって指導上の留意点を記載している学習指導案が多く見られました。各校の素晴らしい実践を紹介しますので参考にいただければ幸いです。

子供の自己肯定感を高める教師の関わり

- 子供の発した「分からない」という本時のねらいにつながる言葉や見られたつまずきから、「〇〇さんの『分からない』と言えることって分かっていてということだね。みんなで一緒に考えよう。」と問いかける**教師の安心感を与える言葉**。



<子供たちに委ねて>

- 「今日の学習で、よかった友達は誰かな。それはどんなことかな？」と、**他者の学び方のよさに目を向けさせ、実感させる授業の振り返り**。
- 問題が解けなかった子供にも「〇〇さんは、新しい技を発見したんだよね。」と、**課題に取り組むプロセスを称賛し価値付ける言葉がけ**。
- 間接指導から直接指導になる際の「今、何やっているの？」「どうなったの？先生に教えて？」という**子供が自らの学びを見つめ、やっていきたいことを自覚させる言葉がけ**。

話し合いが活性化する取組

- グループ学習に入る前に、「友達の話し内容に対して、自分はどう思うかを付け加えて話し合ってください。そして、最後に自分の考えをまとめておいてください」と、**話し合う意図を明確にもたせる教師の明確な指示**。
- 可視化により子供たちが話し合う視点を意識することができる、マトリックス表や曼荼羅チャートなどの**思考ツールの活用**。
- 15分間、既習事項や経験をもとに**子供たちだけで話し合う**授業。



<子供同士でアウトプット>

学級づくりにつながる工夫

- 生徒指導の3機能「自己決定の場を与える」「自己存在感を与える」「共感的な人間関係を育成する」**ことを意図的に組み入れた授業づくりを全教職員で取り組む実践。
- 学級全体で、**選択肢の中から取り組む課題を話し合う**活動。
- 明確に役割を分担し、責任をもって**情報収集に取り組む学習。



<小学校の跳び箱で>

個別最適な学びを保障する取組

- 跳び箱運動における**生徒の実態を把握**し、生徒に適した跳び箱を近隣の小学校から借用して実施する中学校体育の授業。
- 特別支援学級の子供が**交流学級の授業で力を発揮できる**ように、分かりやすいワークシートを個別に準備したり、友達に必要なとされる役割を任せたりする授業。
- タブレットを活用したキーボード入力やフリック入力、音声入力など、**文字を書くことが苦手な子供も友だちと同じように表現できるようにする工夫**。



<文房具の一つとして>

ICTを活用した実践

- 自分のノートを撮影**し、google スライドで**共有する**小学校算数の授業。
- 自分の動きを動画撮影し、**運動の局面を見つめさせる**ためのアプリを活用した授業。

さらに、今年度は、要請訪問Ⅲの依頼が増え、授業づくりを通じた学級づくりへの関心と必要感の高まりが伺えました。要請訪問Ⅱ及びⅢは常時受け付けておりますので、御活用ください。

新任教務主任研修会

5月25日(木)に南会津合同庁舎にて新任教務主任研修会を開催しました。今年度は9名が参加し、「教務主任の役割」や「学校管理」、「教育課程編成」、「学習指導の充実」、「特別な支援を要する児童生徒への対応」について研修しました。

また、今年度は参加者への事前アンケートで「教務主任としての不安や課題等」について集約し、研修内容に生かすようにしました。特に、「教育課程の編成方法」や「教務主任としての知識・心構え」、「校務の簡略化」について課題をもつ先生が多く、課題意識や目的意識をもって本研修に参加する姿が印象的でした。



研修者の振り返りシートより

- 今から次年度の教育課程編成が始まっていることを学んだ。特に、今行っている教育活動の成果や課題を、明日からの教育活動に反映させていく「D-CAPサイクル」や、令和6年度のフォルダを作成して次年度の計画案を保存することを実践していきたい。
- 学校の重点目標を基に、全教員が週案に反省を書く視点を共有することで、同じ視点で子供を見取り、各種教育活動が充実したものになっていくのだと学んだので自校でも実践したい。
- 一人で抱え込まず、管理職や同僚との「報・連・相」が大切である。特に、「〇〇コーディネーター」になっている先生を活用し、学校全体の力を高めていくことが大切だと感じた。

特別支援教育体制促進協議会・教育支援協議会

5月30日(火)の午前に町村教育委員会や町村の保健福祉関係の方々が参集し、「特別支援教育体制促進協議会」を開催しました。今年度の各町村の支援体制整備に向けた取組について現状や課題を話し合う中で、主に「就学相談、教育相談の充実のための取組」が話題にあがりました。保護者が納得し安心して就学先を決められるように、早期から教育委員会、保健福祉機関、学校が連携して教育相談を行っていく具体的な取り組みが提案されました。

また、午後には域内小学校の校長先生が参集し、「教育支援協議会」を開催しました。教育的ニーズを整理することが適切な学びの場を考える上で重要であることが確認されました。



教育支援協議会感想用紙より

- 特別支援教育は、すべての子供たちを対象としており、障がいのあるなしにかかわらず共に学ぶ学校をつくっていきたいと考えた。個々の特性や発達段階に応じた支援を全職員で提供していくこと＝校内体制が大切だと実感しました。
- 教育支援計画が将来の入試に大きくかわることがあることを初めて知ることができてよかった。
- 「その時点で、その子供に最も必要な教育を提供すること」(について)どうしても、教師側(学校)がよかれと考え、押し付けてしまう場面が頭をよぎりました。何が最も必要なのかということ子供と保護者と対話を確実に行っていくことが必要不可欠であることを確認できました。

